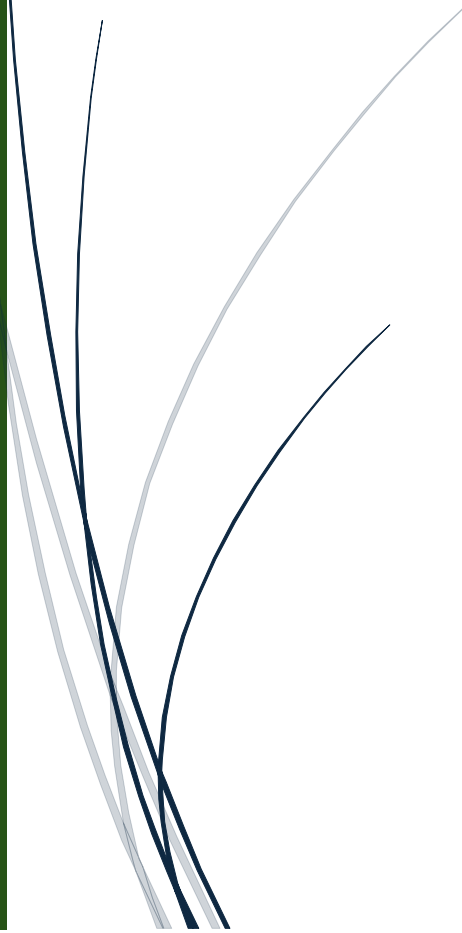




感想文集

2025 連合群馬平和行動



連合群馬平和行動沖縄派遣団
連合群馬平和行動広島派遣団
連合群馬平和行動長崎派遣団
平和行動in根室（関プロ代表団）

- 個人の内容は報告いただいたものから、抜粋・修正しています。
- 当内容、テキスト、画像等の無断転載・無断使用を固く禁じます



自動車総連 富士機械労働組合 河内 一樹

○南風原文化センター

南風原文化センターでは南風原の沖縄戦、戦後史、移民、人々の暮らしについて見学し学ばせて頂きました。その後の見学としては沖縄陸軍病院南風原壕群 20 号の当時使われていた壕内を見学させて頂き、今では考えられない当時の過酷さや悲惨さを知りました。一番印象的なのは、撤退命令が下された際に自力で動けない人に対し、青酸カリ入りのミルクを配布し自決を行った部分がなんとも言えない気持ちになりました。



○平和祈念公園【平和祈念資料館・平和の礎】

平和祈念公園では、沖縄戦で亡くなった人々の名前が刻まれている平和の礎や日本各都道府県別に置かれている慰霊塔などを見学しました。名前が刻まれた石碑については想像以上の人の名前があり驚きました。慰霊塔については群馬の塔の前で黙禱を行い、各都道府県それぞれの慰霊塔の違いを見学させて頂きました。資料館では、沖縄戦での生々しい写真や沖縄戦に至るまでの歴史など知ることが出来ました。中でも、証言の部分においては思い出したくもないだろう内容を涙ぐみながら具体的に細かくお話されていたのを見て心が痛くなりました。



○ひめゆりの塔

ひめゆりの塔という名前は良く聞いたことはありましたが、今回改めてどういった場所でどんな人たちがどんな体験をしたのかを詳しく知ることが出来ました。塔についても、2校で最も多くの犠牲者を出したガマの上に建てられていたことは初めて知りましたし、3Dのイメージではありましたがガマがこんなにも大きいものだと知りませんでした。沖縄戦で亡くなった227人の生徒と教師一人一人の写真と名前が壁に掛けられた部屋では本当にこんな幼い女の子がこの悲惨な戦争に巻き込まれたと思うと言葉になりませんでした。

○旧海軍司令部壕

旧海軍司令部壕では当時実際に使われていた地下壕の見学し、作戦室や通信室、司令官室など当時の姿を見ることが出来ました。大田實司令官をはじめとする多くの将兵が自決したとされる部屋では壁に手榴弾で出来た穴が残されていて爆発の威力が物語っていました。

○最後に

今回、平和行動に初めて参加させて頂きましたが戦争の恐ろしさを知れたこと、罪のない数多くの人々が犠牲に会ったこと、本当にあってはならない事だと強く感じました。80年という長い月日が経ちましたがこの事実を後世に伝えていくことは必要だと思います。今後も長崎や広島など参加する機会があったら是非参加したいと思います。

自動車総連 イチタン労働組合
幕田 大樹

今回の平和行動に参加させて頂いて私としては根室に続いて2回目の参加となります。

1 日目は「連合平和オキナワ集会」で「新たな安全保障を目指して」・「平和式典」の講演が行われ全国の構成組織・地方連合会から那覇文化芸術劇場などは一とに集いました。戦争の歴史を振り返り、平和を守るための努力を続けることの重要性を改めて再確認する場となり、集会の中で語られた戦争の実態は、私たちにとっても重い教訓であり、今の平和は当たり前なものではないのだと強く実感しました。



2 日目のピースフィールドワークでは南風原文化センター・平和祈念公園・ひめゆりの塔・旧海軍司令部壕の見学コースで各施設を訪問しました。南風原文化センターでは当時使われていた壕の中に実際入って、道も狭い中少し開けた場所がありそこで麻酔なしでの手術や手当をしていたことに衝撃を受けました。平和記念公園では群馬之塔に訪問し、沖縄戦争中に亡くなった群馬県出身者の戦没者を慰霊しました。ひめゆりの塔では女学院の生徒たちが最後まで軍と共に行動し介護活動にあたった動画や資料の見学を行いました。旧海軍司令部壕では迷路のような壕が当時のまま残っており、資料館の方には当時の遺品などが展示してありました。

沖縄平和行動に参加し本当に貴重な経験をさせていただきました。当時の戦争の状況や残酷さについて深く学ぶことが出来ました。自分が見学を通して感じたこと、思いを忘れずに、企業に持ち帰って周りの人に伝えていこうと思います。

自動車総連 SUBARU 労働組合
吉野 英樹

私は自身の戦争に対する知見を深めるとともに、先人たちが命をかけて築き上げた「平和」について考え、語り部としてその思いを伝えていくために、初めてこの活動に参加しました。

「平和オキナワ集会」では、沖縄本土復帰から53年が経過した現在もなお、広大な米軍基地の存在が沖縄県の復興を進める上で大きな障害となっていることを知りました。騒音や環境汚染に加え、米軍人・軍属による事件・事故が繰り返され、県民

の生活に深刻な影響を及ぼしている現状に、強い衝撃を受けました。

さらに、普天間飛行場の辺野古への移設については、県民の理解を得られないまま工事が強行されているという実態にも驚かされました。民主的な手続きや住民の声が十分に反映されていない状況は、平和の根幹である「対話」と「共存」の理念に反しているように感じました。この集会を通じて、沖縄が抱える課題は過去の戦争だけでなく、現在進行形の問題であることを実感し、平和について考える視点が大きく広がりました。

フィールドワークでは、「南風原文化センター」、「平和祈念公園」、「ひめゆりの塔」、「旧海軍司令部壕」を視察しました。これらの場所で目にしたのは、戦争という極限の状況の中で、男性・女性を問わず多くの人々が命をかけて戦ったという事実でした。

傷を負いながらも、支援のない中で国のため、国民のために戦い続けた人々の姿を知ること、今私たちが生きている令和の時代が、いかに平和で幸せな時代であるかを改めて実感しました。戦争の記憶を風化させず、命の重みと平和の尊さを語り継ぐことの大切さを、現地での学びを通じて強く感じました。

この体験を通じて、私は「平和」とは単に戦争がない状態ではなく、人々が安心して暮らせる社会を築くために、過去と向き合い、今を見つめ、未来へと語り継いでいくことだと強く感じました。沖縄の地で学んだことを胸に、これからも平和の尊さを伝えていく語り部としての歩みが続けていきたいと思います。

自動車総連 SUBARU 労働組合
木村 哲也

2025年6月、連合による「平和行動 in 沖縄」に参加し、沖縄戦の歴史と平和の尊さについて深く学ぶ機会を得ました。

最初に訪れた南風原文化センターでは、沖縄陸軍病院南風原壕群の実物を見学し、戦時中の医療現場の過酷さを実感しました。壕内の暗さと湿気、限られた医療資源の中で命をつなごうとした人々の姿に胸を打たれました。

平和祈念公園では、群馬之塔にて群馬県出身の戦没者を慰霊しました。静かな祈りの中で、戦争の犠牲となった一人ひとりの命の重みを感じ、平和の礎に刻まれた名前の多さに言葉を失いました。

次に訪れたひめゆりの塔では、学徒隊として動員された少女たちの悲劇に触れました。資料館では、彼女たちの手記や遺品が展示されており、戦争が若者の未来を奪った現実を目の当たりにしました。

最後に訪れた旧海軍司令部壕では、沖縄戦末期の日本軍の実態を学びました。壕内の指令室や自決の跡がそのまま残されており、戦争の極限状態が生々しく伝わってきました。

今回の平和行動を通じて、戦争の悲惨さと平和の尊さを改めて実感しました。社会人として、過去の歴史を正しく理解し、平和を守る責任を自覚することの大切さを強く感じました。

.....
J A M ミネバアユニオン松井田支部
山中 信二

・23日 15:00～

沖縄集会（那覇文化芸術劇場）

戦後の沖縄の歴史や現在まで抱えてきた問題点、且つ今まさに起きている問題等説明を受けた

在日米軍（一握りの者と信じたい）における問題が毎年のように繰り返される現状に憤りを強く感じた

・24日 09:00～

南風原文化センター・沖縄陸軍病院南風原壕

戦時中の凄惨な現状を肌で感じた

平和祈念公園、資料館、群馬之塔へ献花

資料館に残された様々なものを目の当たりにし絶対に繰り返してはならない事と肝に銘じた

ひめゆりの塔、資料館、折鶴献納

若くして亡くなっていった女学生の苦しみや悲しみが聞こえてくるようで辛くなってしまった

旧海軍司令部壕見学

・「米軍基地の整理・縮小」と「日米地位協定の抜本的見直し」を求める集会・デモ

日本各地から集まった連合の皆さんとの懇親を深めた

要約

沖縄における凄惨な歴史や現状の問題など、メディアを通じて頭では理解していたつもりであったが、実際に起きた場所を訪れた際の空気感の違いに驚かされた

あくまでも、知識は知識であり理解したつもりになっていたことに恥ずかしさを覚えた

今後は実際に肌に触れた感覚を胸に、本当の平和を考えていきたいと思う

.....
電力総連
東京電力労働組合群馬地区本部前橋支部
千明 豊

私は「2025 平和行動 in 沖縄」を通じて、沖縄の歴史とその平和への取り組みについて深く考える機会を頂きました。沖縄は第二次世界大戦中に激しい戦闘が行われ、民間人を含めた多くの命が失われた地です。戦後80年という節目の年に、その歴史を学ぶことで、戦争の悲惨さと平和の重要性を改めて感じました。

平和学習では、沖縄戦の資料館を訪れ、戦争の実態を知ることができました。展示されている写真や証言は、戦争が人々に与えた苦しみを生々しく伝えていました。

この平和行動で特に印象に残っている言葉は、「私はこれまで、戦争は辛い記憶しかないから早く忘れてしまいたいと思っていた。しかし、戦後80年が経過し戦争当時を知る人・語れる人が少なくなっている。当時の事を思い出すと今でも胸が苦しくもなるが、戦争の悲惨さ・愚かさを後世に伝えていく事も慰霊になると考え、地道に語り継ぐ活動を続けていく」というものです。

沖縄の人々は、過去の悲劇を乗り越え、語り継ぐことで未来に向けて平和を築こうとしています。私たちは日頃、仕事など日常生活に追われて、「戦争・平和」について考える機会がほとんどありませんが、この何気ない日常生活こそが平和なのだ改めて考える教訓となりました。

沖縄では現在も米軍問題・基地問題など抱えており、これらは沖縄県だけの問題ではなく、もっと私たちも興味関心を持たなければいけないと再認識しました。

これからの未来に向けて何ができるかを考えるきっかけとなりました。

.....
高崎地協 群馬県職員労働組合
鈴木 教倫

今回、初めて「平和行動 in 沖縄」に参加させていただきましたが、とても貴重な体験をすることができました。戦後80年の節目ということもあり、メディア等でも取り上げられていますが、この平和行動を通じ、美しい島である沖縄の地で実際に起こった惨劇を肌で感じる事ができました。

1日目の「連合2025平和オキナワ集会」では、全国から918名の仲間が参加し、基調講演と平和式典が行われました。基調講演は地元衆議院議員の屋良朝博氏から「新たな安全保障を目指して」と題して、安全保障の意味、現状などについて説明がありました。平和式典ではピースリレーが行われ、次の平和行動開催地の連合広島へ平和

の旗が引き継がれました。開催日の6月23日は沖縄県の「慰霊の日」であったため、県内各地で平和集会が行われていました。

2日目は、連合埼玉の参加者とともに南部戦跡をめぐる旅をしました。初めて訪れる場所ばかりですべて衝撃を受けました。その一つ、南風原文化センターでは陸軍病院南風原陸軍病院壕群20号壕内に実際に入らせてもらいました。壕に向かう途中には、ご飯を運ぶため、弾雨の中ひめゆり学徒が駆け上がった「飯あげの道」も残されていました。壕内は暗く、ジメジメしていました。現地ガイドさんの話ではこの場所で負傷兵の治療を麻酔なしで行われていたそうで、手術と言っても手足が腐ってしまうので切断するだけなど、どの話も想像を絶するものばかりでした。切断した手足を埋めた場所も教えてもらい、今でも掘れば誰だかわからない骨が出てくるという説明がありました。また、沖縄平和祈念公園では美しく壮大な海をバックに設置されている各都道府県の慰霊塔を訪れ、連合群馬は群馬県の塔に献花を行いました。資料館では沖縄戦の生々しい写真や映像とともに展示品を見学しました。その後訪れたひめゆりの塔では群馬から持参した折り鶴を捧げ、平和祈念資料館を見学しました。当時ひめゆり学徒隊だった方の話が映像で流れていましたが、重く胸に刺さりました。戦争がなければ普通に学生として青春を謳歌できたはずなのに前途ある若者の未来が奪われてしまったことは、無念だったと思います。

奇しくも平和行動の初日である「慰霊の日」の朝、アメリカ軍がイランの核施設を攻撃したという報道がありました。ロシアとウクライナの戦争、イスラエル・パレスチナ紛争などでも多くの犠牲者が出ていますが、これは、今回見聞きした惨劇が今現在も世界のどこかで存在しているということであり、早期の終結を願うばかりです。この行動に参加して、戦争の惨めさや絶対に戦争を起こしてはいけないということを痛感し、そしてこのことを後世にも伝え続ける必要があると改めて感じました。

.....
高崎地協 日本化薬労働組合高崎支部
秋山 裕貴

6月23日・24日の2日間、「2025 連合平和行動 in 沖縄」に参加しました。連合が主催するこの取り組みは、沖縄戦の歴史を学び、今もなお続く米軍基地問題について理解を深め、平和を次世代に継承することを目的としています。実際に現地を訪れ、話を聞き、目で見て感じたことは、資料やニ

初日の集会では、衆議院議員・屋良朝博さんによる講演や、連合関係者の訴えを通じて、平和の実現には軍事力ではなく、対話や文化を通じた「スマートパワー」が必要であることを学びました。また、沖縄に集中する米軍基地の現状と、地元住民の生活に及ぼす影響についての報告には、改めて強い問題意識を抱かされました。

翌日はピースフィールドワークに参加し、南風原文化センター、沖縄陸軍病院南風原壕、平和祈念公園、ひめゆりの塔、旧海軍司令部壕を巡りました。戦争の爪痕が今も色濃く残る場所での学習は、平和の尊さを肌で感じる貴重な体験でした。そして午後には県庁前から国際通りへと続くデモ行進に参加し、日米地位協定の見直しや基地の整理・縮小を訴える声を上げました。参加者のひとりとして声を届けることができたことに、大きな意義と責任を感じました。

今回の平和行動は、過去の戦争を風化させず、現在の課題と真摯に向き合いながら、未来に希望をつなぐ活動だと実感しました。この経験を職場や地域で共有し、平和の大切さを広めていきたいと思います。

今回の行動を通して印象的だったのは、戦争の記憶が単なる歴史ではなく、今もなお現在進行形の問題とつながっているという事実です。沖縄では米軍基地に起因する事故や事件、騒音被害が今も続いており、県民の生活と人権が脅かされている現状を目の当たりにしました。私たち本土に住む者として、この問題を「遠い話」として済ませてはいけないという強い責任を感じました。

また、同じ志を持つ全国の仲間と行動を共にしたことで、平和運動は一人ではなく、組織や地域を超えて連帯できるものだという確信も得ました。行動に参加することで自分自身の意識が変わり、それが次の一歩につながっていく。その実感を胸に、今後も微力ながら平和を願う活動に関わっていきたいと思います。



自動車総連 SUBARU 労働組合 村松 晴規

・参加目的

核廃絶に向けた署名活動は毎年行ってきたが核兵器はなくなっていない。なくすことができない理由を正しく理解し、職場に発信し、今後の活動につなげていく。

・テーマ① 被爆体験講和

平野氏の講和を聞いて、自分が無知であることを痛感した。核廃絶を訴えているにも関わらず、約 12000 発の核兵器が地球上に残っていること。日本は完全なる被害者だと思っていたが、朝鮮の方々に対しては人種差別を行い加害者側であったこと。約 25 年前、私が高校生のときに修学旅行で広島を訪れ、原爆ドームを見学し、当時の語り部の方から聞いた話には、日本も加害者であることの印象はなく記憶にない。今と昔で印象が違うのは自分のせいでもあると思う。視点も変わってしまったし、25 年間の経験もある。それを踏まえたうえで聞いた今回の講和からは、アメリカは加害者の日本に対し制裁を加えたのだと感じてしまった。今も苦しんでいる被害者の方々を想えば、当然原爆や戦争を容認して良いわけではない。私たちは人である以上、言葉という公平な武器があり、80 年経過しても苦しむ核兵器に依存する必要はない。改めて核廃絶に向けて、なくなるまで活動を継続しようと思う。

・テーマ② 平和ヒロシマ集会

原爆が落とされた当時の状況の実体験を語ってくれた切明氏のお話は生々しく、常に鳥肌が止まらなかった。目の前で多くの方が亡くなり、目の前で火葬したことを辛そうな表情で語ってくれた。思い出すことさえ嫌だと思うのに、私たちに語ってくれたことには感謝しかない。核兵器はダメなものであることはほとんどの人が理解していると思うが、当時を経験した方から話を聞くことで本当に使ってはいけないものであり、本当になくさないといけないものであることを再認識できた。

若者からのメッセージ「ビリョクだけどもリョクじゃない！」日本だけでなく様々な国と交流し、核廃絶に向けて活動してくれている高校生平和大使の存在と活動内容を知れたこと、尚且つ息子も真剣な眼差しで見て聞いてくれていたことは今回の活動の中で一番印象深く将来への希望を持た。実体験を伝えることはできなくても、語り継ぎ、2 度と核兵器を使用しない世の中に向けて今の若者から次の若者へ。世界の平和な将来を意識して語り継いでいってほしいと思いました。

・まとめ

核抑止力という壁は大きく、核廃絶に向けて多くの年月が必要であることを認識した。しかし、諦めず投げかけてくれている若者がいることが確認できたし、息子もそれぞれの活動の中で考え自分の意見を見出してくれた。一人でも多くの方が後世に語り継いでいくためにも親子派遣を継続した活動にしていただければと思う。ありがとうございました。

(親子派遣) 村松 一颯

今回、広島で原爆や平和について学ぶ機会をいただき、折鶴献納、被爆体験講和、平和記念資料館の見学、平和ヒロシマ集会、ピースウォーク、そして広島市主催の平和記念式典に参加しました。どれも実際にその場に立たなければ分からないことばかりで、心に深く刻まれる経験となりました。その中でも、特に印象に残ったことをまとめます。

・被爆体験講和

被爆体験講和では、李鍾根さんの体験を平野先生が話してくださり、核の怖さや当時の広島の悲惨さなどを細かく説明してくださり、常に鳥肌が立つほど話に飲み込まれていきました。

・平和ヒロシマ集会での高校生大使の言葉

平和ヒロシマ集会では高校生大使が核兵器廃絶への想いや地域での活動を話してくれました。同じ高校生なのに、堂々と自分の意見を発信する

で、過去の出来事を忘れさせないことが重要です。今回の広島集会で目にしてきたこと、聞いてきた原爆、戦争の記憶は、単なる過去の出来事とせず。今後起こりうることの抑止力として、未来につなげていかなければいけないことであり、平和のためにできることを一人一人考え続けてなければならぬと感じました。



.....
電機連合 パナソニック AP 空調冷設機器労働組合
田端 佑司

このたび、平和行動(広島)派遣団の一員として、初めて広島を訪れる機会をいただきました。参加前は、広島について「原爆が投下された街」という知識しか持っていませんでしたが、現地で見たり聞いたことは、その想像をはるかに超えるものでした。

平和記念公園や原爆ドームを訪れ、静かに佇むその姿を目にしたとき、80年以上前にここで起きた出来事が決して過去のものではなく、今も多くの人々の心に生き続けていることを強く感じました。被爆直後の街の写真や遺品、被災当時の記録映像を目にし、胸が締め付けられる思いがしました。

特に心に残ったのは、被爆者の方による体験証言です。ご自身の青年期の記憶を、ひ孫に同じ経験をさせてはいけないと語ってくださる姿から、戦争や核兵器がもたらす悲惨さ、そして生き延びた方々が背負ってきた苦しみの大きさを実感しました。「あの日のことを語る人は、年々少なくなっている」という言葉が胸に響きました。直接お話を聞けたことは、私にとってかけがえのない経験となりました。

今回の参加を通じて、平和は与えられるものではなく、私たち一人ひとりが意識し、行動し続けてこそ守られるものだ学びました。被爆者の方々の想いを次の世代へとつなぐため、私自身も身近な人々に今回の経験を伝え続けたいと思います。広島で学んだことを胸に、日々の生活の中でも平和のためにできることを実践していきたいと強く感じました。

.....
電機連合 ナカヨ労働組合
有泉 和憲

広島に原爆が投下され、80年の節目となる今年、初めて広島の平和行動に親子で参加をさせていただきました。現在の世界情勢は各地で発生する紛争により大変不安定であり、一部の大国が核兵器を多数保有している状況が続いています。世界で唯一の被爆国である日本、特に広島、長崎では復興までに長い年月が掛かっているとともに、今もなお後遺症に苦しんでいる人が多くいること、また今回の行動を通じて今ある平和な日本がいかに重要であるかを再度考えるきっかけとなりました。

日本国内の一部では核兵器に対する抑止力は核兵器が安上がりだと言った意見を出している人もいますが、戦争被爆国である日本として、核兵器は持たない、また絶対に撃たせない。そして最後の被爆国にするとした強い信念のもと、日本が全世界に対して核兵器廃絶の必要性を訴え続けなければなりません。

今回の行動では、平和記念公園での折り鶴献納後、被爆体験講和、平和記念資料館見学、平和記念公園内のピースウォーク、連合平和ヒロシマ集会と最終日には平和祈念式への出席となりました。被爆体験講和では、1945年8月6日午前8:15に広島にたった一発の原子爆弾が投下されたことで一瞬の内にいつも日常が無くなってしまったこと。それが本当に一瞬であったこと。その後、広島の大変な惨状と間接被爆(二次被爆)により長い年月苦しんでいることなど、想像を絶する状況であったとお聞きしました。伝承者の平野 由美枝さんが最後に「今、今日この時を日本の戦前にしてはならない。唯一の被爆国としてずっと戦後を守り続けなければならない。」という言葉が胸に刺さるとともに今ある平和な日本がどれほど重要であるかを再確認させていただいた講和となりました。

講和後の資料館見学では、お聞きした内容と実際の展示物を見ることでその日広島であった出来事を再確認することができました。

ピースウォークでは、連合広島青年委員の協力により平和記念公園内の各モニュメントの説明等を受け、どのような思いで各種モニュメントがあるのか、ポイントを押さえた説明をお聞きすることができ、大変勉強になりました。暑い中ではありましたが、ガイドの皆様には本当にお世話になりました。

最終日には広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式に参加をしました。多くの方が80年前に原爆を投下された午前8:15に黙とうを捧げ、真の平和を願う式典に参加でき本当に良かったと感じるとともに、今ある平和の重要性を語りつないでいこうと思っています。

最後になりますが、今回このような貴重な経験を親子でさせていただきましたことに感謝いたします。



(親子派遣) 有泉 里咲

私は広島・親子派遣団に参加して、今まであまり考えたことのなかった「戦争」について考えることができたと思います。

被爆体験講話での平野由美恵さんの話で、私はとても印象に残っている話があります。それは、「死体はその後燃やされて、その灰は普通のゴミと一緒に捨てられた」ということです。とても衝撃的な話でした。まさか誰かわからずに燃やしてしまうなんて思ってもいませんでした。「今を日本の戦前にしないこと」というのも話していました。確かにもう二度と同じような被害がないで欲しい、このまま平和な状態が続いて欲しいと話聞いた時に感じました。その後に行った平和記念資料館では、平野さんが言っていたような原爆の被害が写真としてあり、とても原爆の恐ろしさを知ることができました。

連合平和ヒロシマ集会に参加した時に高校生平和大使という人たちがいること、行なっていることを初めて知りました。私と同年代の人たちが、核兵器の廃絶と平和な世界の実現をめざして活動を日本や海外で行っていることに驚いたし、すごいとも思いました。私は社会の授業以外で原爆や戦争について考えたり、知ろうと思ったりしたことがありませんでした。今回の集会でこんなにも高校生たちが頑張っていることを知って、私ももう少し戦争について調べてみようと思うきっかけになりました。

今回は広島の前爆・戦争について知ることのでき、またもっと知ろうというとても貴重な時間でした。ありがとうございました。

.....
UA ゼンセン フレッセイ労働組合
染宮 睦

初めに戦後80年という節目に2025連合群馬平和行動に参加させていただき感謝申し上げます。単組でも行く機会が過去にあり自分の中で見聞きしたつもりでしたが、今回貴重な体験ばかりでした。

まず、被爆体験講話において、被爆体験伝承者の平野様より当時16歳の在日韓国人の方の被爆体験談を聞き、幼き頃より朝鮮人であるがゆえに差別で苦労を重ね、国籍を隠して仕事に就き、その仕事先に向かう途中での原爆投下による被爆や原爆投下後の惨状、残留放射線による後遺症など悲劇的な体験談を聞くことが出来ました。今もなおアメリカ、ロシアを中心に抑止力として核兵器が保持されていますが、均衡を保つ役割でもあり、使用が誤って引き起こされるリスクが常に付きまとう事も無視できません。世界中に12000もの核弾頭がある話を聞き、核廃絶されることを願うばかりです。

平和記念資料館の見学では、当時の原爆の爆発によって引き起こされた恐ろしい被害や、被爆者たちの証言、戦後の復興の過程などが展示されており、展示物には、当時の写真や映像、被爆によって傷ついた衣服や家具、さらには遺品なども含まれ、原爆がもたらした破壊的な影響が視覚的に伝わってきました。しかしながら見学者がかなり多くゆっくり見ることが出来なかったのが残念でした。

ピース・ウォークでは、連合広島青年委員によるピースガイドより広島平和記念公園内の慰霊碑の説明を受けました。普段では時間の都合でスルーしがちな慰霊碑や施設を巡り、原爆の恐ろしさを改めて学ばせていただきました。

連合2025平和ヒロシマ集会にも参加しました。伝承ではない、

被爆経験者の切明様より当時15歳の時のお話を伺い、被爆体験伝承者からの話とはまた違った感じ方をしました。同じ被爆体験でも心まで響いてくる原爆の恐ろしさの体験談でした。また、高校生平和大使からの「ビリョクだけどもリョクじゃない」というワードに心惹かれました。

広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式典では、広島国際会議場からの視聴になりましたが、それぞれの代表の方の式辞や宣言、誓いや挨拶でも原爆の悲惨さ、多くの尊い命が失われたこと、核兵器廃絶への想い、恒久平和への願い、二度と繰り返さない為にも風化させることなく語り継いでいく決意が感じ取れました。

最後に原爆ドームを見た時、あの崩れた建物が今もなお立っている姿が、言葉にできないほどの重みを感じさせ、あの建物が持っている歴史や、

そこに込められた無数の命の重さを思うと、歴史的な意味だけでなく、現在も続く平和へのメッセージを強く感じました。広島で感じる平和の重みは、ただ過去を振り返るだけではなく、未来に向けた強いメッセージが込められているのではないかと感じ取れました。



高崎地協 八木工業労働組合
小井土 聖登

高崎地協 U Aゼンセン群馬県支部
丹羽 宝宏

私は8月4日～6日の間「連合平和集会 in 広島」に参加しました。

参加して改めて思った事は、平和の大切さと、次世代に継承すべき戦争の記憶について深く考える機会を得ました。

広島は、1945年8月6日に世界で初めて原子爆弾が投下された場所であり、多くの尊い命が一瞬で奪われた悲劇の地です。平和記念公園に立ち、原爆ドームを前にしたとき、歴史の重みを肌で感じ、言葉にできない感情が胸に込み上げてきました。

平和集会当日、原爆投下日当日の貴重な証言を語り部の方から直接聞くことができました。「あの日、周りの人が次々と命を落とした。なぜ助けられなかったのか、家族は大丈夫なのか」という言葉が特に印象に残っています。その語りには、どんな教科書や映像よりも深い「真実」がありました。

また、連合の皆さんによる平和に対するメッセージや、若い世代による平和宣言などもあり、世代を超えて「平和を守る」強い意志が会場全体に広がっていました。集会を通じて、「過去を知ること」が未来の平和をつくる第一歩であることを強く感じました。

今回の体験を通じて、私は「自分にできる平和活動とは何か」を考えるようになりました。たとえ小さな行動でも、戦争や核兵器のない世界を目指す一人として、できることから始めたいと思います。未来を生きる子どもたちに、戦争のない世界を手渡せるよう、日々の生活の中でも平和を意識し続けたいと思います。

2025連合群馬広島平和行動に参加させて頂き大変ありがとうございました。

終戦から80年、人類史上初めての原子爆弾投下により広島の街が一瞬にして破壊され、市民の尊い命が失われた被爆地を訪れ、平和について直接肌で感じて学べたことはとても貴重な経験となりました。

2歳の時に被爆し、10年後に白血病で亡くなった佐々木禎子さんの死を悼んで建立された原爆の子の像で、核兵器による苦しみ、悲惨さと恐ろしさを二度と繰り返してはならないと平和の願いを込めて折鶴献納しました。

広島国際会議場で被爆体験伝承者の平野由美恵さんから「核兵器のない平和な世界を目指して」と

題し、被爆者の李鐘根(イジョンゲン)さんから受け継いだ被爆体験と実相を聴きました。

当時、在日韓国人でいじめを受けたことや被爆して当時の悲惨な状況、現在も放射線被害による後遺症に苦しんでいる人達がいることについて詳しく説明していただき、核兵器の恐ろしさを改めて感じました。

平和記念資料館ではCG映像による当時の広島の街に原子爆弾が投下され一瞬にして街が焼け野原となる原爆の破壊力に驚きと、多くの尊い命が奪われたことに深い悲しみを受けました。

開催地の諸行動としてピース・ウォークが行われ、平和記念公園を連合広島青年委員によるピースガイドから主な慰霊碑の説明を受け、特に原爆ドームは原爆による爆風が真上から働いたため壁の一部は倒壊を免れドームの鉄枠とともに象徴的な姿を保ち続けたまま歴史が刻まれた原爆ドームの外観は迫力がありました。

連合平和ヒロシマ集会では被爆体験証言として切明千枝子さんより被爆体験談を聴き、広島の街(今、歩いている地)原爆で亡くなった方々がいることを決して忘れないで下さい、今生きていることに感謝して下さいと話され、自分自身が悲しみに胸が締めつけられる思いになりました。

高校生平和大使のメッセージ「ビリョクだけどもリョクじゃない」平和活動を聴き、核兵器の廃絶と平和な世界を目指す活動を通じて連合群馬派遣団から署名を提出し交流しました。

被爆80年平和祈念式に参列し原爆犠牲者の御霊と平和を願いながら黙とうを捧げ、恒久平和に向けて核兵器根絶を目指し二度と悲惨な過ちを繰り返さないためには一人一人が思いやりの気持ちを持って行動することが大切だと思います。

また、私達が被爆者から伝えられた平和への願いを後世に、しっかりと伝えていかなければならないと考えます。

(親子派遣) 高校2年生 小井土 陽音

僕は今まで原爆について深く考えてこなかったので、もっと原爆について知りたいと思い親子で連合群馬派遣団の平和行動に参加しました。

戦争・原爆については授業などで学習したことがありますが、実際に広島市の平和記念資料館を訪れ、原爆の恐ろしさをより身近に感じました。

そこでは当時の写真や衣服などが展示されており、当時の悲惨な状況の実際を知ることができました。広島上空600メートルで爆発して広島中心部を壊滅させました。約600メートルの高さは原爆によって一番被害が出る高さだと考えられています。

原爆は一瞬で多くの命を奪い、街を破壊するだけでなく、生き残った人にも大切な人を失った悲しみや放射線による被害に苦しんでいることを知り、戦争がもたらした被害の大きさを実感しました。

また、今こうして安心して生活できていることが、辛い思いをしながらも後世に引き継ごうと努力してくださった方々がいるからだと思えることができました。そして、平和を願う人々の思いに触れ、私もその願いを受け継がないといけないと改めて感じました。

だからこそ戦争の悲惨さを学ぶことをやめてはいけないと考えます。広島市の原爆を知ることは、未来の平和につながる一歩だと思います。この貴重な経験を忘れることなく、平和な社会を築く努力をしていきたいと思えます。





自動車総連 イチタン労働組合 唐來 泰史

今回は長崎平和行動に初めて参加させて頂きました。

1 日目は「連合 2025 平和ナガサキ集会」では「被爆者の訴え」・「国際政治と核兵器の現状」の講演が行なわれ全国の構成組織・地方連合会から長崎県立総合体育館メインアリーナに集いました。会場入り口でも(高校生1万人署名・1万本えんぴつ運動)等、高校生が平和活動に積極的に取り組んでおり、次世代による未来の平和に向けた取り組みが進んでいるのを実感しました。



2 日目では長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典・長崎原爆資料館見学・ピースウォークにより各施設を訪問しました。

長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典は悪天候により途中からになりましたが、長崎市平和公園で千羽鶴の献納など、参加してきました。テレビでしか見たことが無かったので、現地で参加する事で重みを感じる事が出来ました。

原爆資料館では、原爆投下で時が止まったままの時計に始まり原爆の悲惨さや壮絶さを伝える資料が多数展示してあり、原爆の恐ろしさを感じる事が出来ました。

ピースウォークでは、長崎市平和公園周辺の史跡などをガイドしてもらいながら、見て回りました。原爆の中心地ということもあり、被爆の痕跡や防空壕が残っていることに衝撃を受けました。

今回長崎平和行動に参加させて頂けた事は、本当に貴重な体験でした。

父親も太田で戦争を語り継ぐ活動をしており、戦時中の物を見たり話を聞いた事がありましたが、原爆はさらに悲惨な状況にあったのを知りました。

是非、社内でも共有して平和に繋がる活動に協力していきたいと思います。

機会があれば、他の地域の平和行動にも参加してみたいと思いました。

自治労 前橋市役所職員労働組合 吉原 宏貴

この夏、長崎平和行動に参加し、忘れられない三日間を長崎の地で過ごしました。羽田空港から長崎空港へ降り立ち、貸切バスでホテルへ向かう道中、車窓から見える長崎の街並みに、この地が背負う歴史の重みを感じながら、静かに思いを馳せました。

初日は「平和長崎集会」に参加し、全国から集まった仲間たちと共に平和への誓いを新たにしました。それぞれが抱く平和への想いに触れることができ、心に残る時間を過ごしました。

2 日目の8月9日は、被爆からちょうど80年という節目の日。私たちは平和公園や爆心地公園を訪れ、原爆で命を落とされた方々に黙とうを捧げました。また、折鶴を献納し、静かな空間の中で、平和への祈りを胸に刻む時間となりました。続いて訪れた原爆資料館では、被爆者の遺品や写真、当時の長崎の様子を伝える展示物の数々に触れ、原爆の恐ろしさを改めて実感しました。焦げ付いた衣服や溶けたガラス瓶など、一つひとつの展示が、想像を絶する苦しみと悲しみを物語っていました。



その後のピース・ウォークでは、被爆地を自分の足で歩きながら、当時の人々の恐怖や苦しみを少しでも感じ取ろうと努めました。

この時間は、ただ歩くだけでなく、平和への想いを再認識する貴重な機会となりました。

今回の平和行動を通して、核兵器の恐ろしさと平和の尊さを改めて認識しました。被爆から80年が経過しても、その悲劇は決して風化させてはならない歴史です。この経験を日々の生活の中で活かし、平和のために自分にできることを探し、行動していきたいと強く思います。長崎で出会った人々の想いと、この地で刻んだ平和への誓いを忘れず、未来へ向けて平和のメッセージを発信し続けていきます。

……………
自治労 前橋市役所職員労働組合
五畠 陽子

令和7年8月8日（金）に長崎市油木町の長崎県立総合体育館で開催された「連合2025平和ナガサキ集会」に参加しました。

「ノーモアヒロシマ、ノーモアナガサキ、ノーモアヒバクシャ」—この言葉に込められた覚悟と祈りの深さを、これまで十分に理解できていなかったことを痛感しました。原子爆弾という大量殺戮兵器の記憶を風化させることなく、再び戦争で使用されることがないように。そして、長崎を最後に同じ悲劇が二度と繰り返されないように。という強い願いが、この集会には込められていました。

今回の平和行動は、終戦から80年という節目にあたり、長崎の地で平和の尊さと核兵器の悲惨さを学ぶ貴重な機会となりました。被爆当時9歳だった羽田麗子様から直接体験を伺い、「ナガサキ・ユース代表団」の発表を通じて、被爆者の高齢化が進む中で、次世代への継承の重要性を学びました。共通して語られたのは「対話」の重要性。国や文化、背景が異なる人々の間で意見が対立することがあっても、相手の思いや考えを尊重し、対話を通じて向き合うことの大切さを伝えるメッセージは、暴力ではなく言葉で解決することの意義を深く教えてくれました。核兵器のない世界を目指す強い思いは、参加者一人ひとりの心に深く響いたと思います。会場には国際的な参列者の姿もあり、長崎から発信される平和への願いが、確実に世界へと広がっていることを実感しました。

翌日、8月9日には長崎市松山町の平和公園で開催された「第80回長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」の見学を予定していましたが、あいにくの豪雨により、テント外からの見学は叶いませんでした。それでも、千羽鶴の献納と原子爆弾落下中心地碑での黙祷を行い、平和への祈りを捧げることができました。その後、長崎原爆資料館を見学し、貴重な展示品の数々を拝見することで、原

子爆弾の悲惨さと平和の尊さについて改めて深く考える機会となりました。

ピースウォークでは、被爆遺構や平和関連施設を巡りながら学習を深めることができました。連合群馬、連合埼玉の参加者との交流もあり、新たな出会いに恵まれました。

帰宅後、ニュースで印象的な調査結果を目にしました。アメリカの世論調査では、1945年当時、原子爆弾の投下について、「戦争を終わらせるために必要だった」と考える人が、85%と圧倒的多数を占めていました。しかし、時が経つにつれてその割合は徐々に減少し、2025年の調査では「正当だった」と答えた人は35%、「正当ではなかった」が31%、「わからない」が33%と、意見が大きく分かれる結果となっていました。この変化は、被爆の実相を世界に粘り強く語り続けてきた方々の努力の成果であり、「核兵器はいらない」という訴えが、長年にわたって人々の意識に影響を与えてきたことの現れだと感じました。

今回の平和行動を通じて、平和への願いを共有し広げていくことの重要性を強く感じました。今後は、平和への思いを自分の周囲にも発信していきたいと考えています。



……………
電機連合 PHC労働組合
猪野 啓章

結論：『長崎を最後の被爆地に!!』 ビリョクだけど

ムリョクじゃない/高校生平和大使活動を応援

〈長崎に原爆が落とされた訳〉

当初、原爆投下の第一目標は九州の小倉とされていましたが、小倉上空が雲で覆われていたため第二目標の長崎に変更されました。長崎は空襲の被害をあまり受けておらず原爆の威力や効果を確認しやすかったこと、三菱造船所をはじめとする兵器工場や造船所が集まっていたことなどが、原爆投下地に選ばれた理由だと考えられています。



原子爆弾投下中心地

1945年8月9日11時02分。アメリカのB29爆撃機から投下された原子爆弾は松山町171番地の上空約500mで炸裂し、一瞬のうちに多くの尊い人命を奪いました。

〈原爆の甚大な被害〉

長崎市松山町上空で炸裂した原爆は長崎に甚大な被害をもたらし、強烈な熱線と凄まじい爆風が一瞬にして美しい街と人々の命を奪いました。爆心地から1km以内の地域では家屋が原型をとどめないほど破壊され、爆発時に放出された大量の放射線により無傷の被爆者も大多数が亡くなり、放射線による被害は生き残った人々にも深刻な影響を与え、今もなお被爆者の健康を脅かし続けています。

原爆の閃光により焼け付いた木の葉跡



プルトニウム爆縮型 原爆ファットマン

〈平和活動〉

長崎の高校生平和大使活動などの「平和教育」については、広島や長崎、沖縄などの限られた地域や、関心の高い人々のみにおいて議論されることが多く、温度差は大きく広がっていると思います。

組合活動を通じて平和活動を広めていければと考えます。

電機連合 パナソニック AP 空調冷設機器労働組合

権田 雄也

8月8日から8月10日の期間、平和行動 in 長崎に参加させていただきました。長崎で何が起きたのかは歴史上では知っておりましたが核兵器の脅威について、あらためて強く感じられた3日間でした。

初日に2025 平和ナガサキ集会に参加させていただきました。ナガサキ集会ではユース代表団、高校生平和大使の方が若者からのメッセージとして話をされました。次世代への継承ということで若い世代の方々が原爆投下から80年たった今もこれからも当時の悲劇を忘れない為、また平和の願いを伝える活動について話されていました。私もこの集会に参加したことで「ビリョクだけどもリョクじゃない」という言葉に感銘を受けこれを胸にいろいろな方にこの集会で聞いたことを伝えていこうと感じました。実際に被爆された方のお話しも聞くことができました。原爆投下後の長崎は、道端には焼け焦げた死体の山、更地と化してしまった街並み、放射線の拡散など、すさまじい状況だったとのことでした。私は原爆投下を歴史上でしか知らなかったため実際に被爆した方のお話はとても衝撃的でした。

翌日は大雨の影響で平和祈念式典には参加できませんでしたが、連合群馬各組織で作成した折り鶴を原爆落下中心地に納めてきました。当日は悪天候のなかでしたが沢山の方が集まられていました。外国人の方も多く参加しており、国際的な注目度がうかがえました。とてもたくさんの方が平和を願っているのだと感じました。平和について考えさせられるとともに、あらためて、核兵器のない世界になってほしいと願うばかりです。

午後にはピースウォークに参加させていただき、記念碑などを見ました。その中でも一番有名な平和祈念像見た際には深く考えさせられることとなりました。像の完成後に被爆の治療を全額負担する被爆者が長崎市の資金の使い方に疑問をい দিয়ে新聞に投稿したとのことでした。被爆者が長期的に苦勞されていたことがうかがえますし、80年たった今でも被爆に苦しんでいる方はいるそうです。いろいろと考えさせられる内容ですが私はこれからもたくさんの方が祈念像を見て、平和について考えるきっかけになってくれればと思います。

原爆資料館も見ることができました。実際に核兵器の爆発の被害にあった物品や死体の写真、また投下時の時刻で止まっている時計などを見るととても心が締め付けられる思いになりました。この平和行動で、戦争の悲惨さ、核兵器の恐ろしさを改めて感じました。この思いを自組織や家族に伝え、忘れることのないようにしたいと思います。

このたび、平和行動(広島)派遣団の一員として、初めて長崎を訪れる機会をいただきました。参加前は、長崎について「原爆が投下された街」という知識しか持っていませんでしたが、現地で見たとの・聞いたことは、その想像をはるかに超えるものでした。

平和公園や原爆資料館を訪れ、静かに佇むその姿を目にしたとき、80年以上前にここで起きた出来事が決して過去のものではなく、今も多くの人々の心に生き続けていることを強く感じました。被災時刻のまま止まった時計や、被災に合い生き残ったものの皮膚が焼けただれた写真や、被災当時の記録や映像を目にし、胸が締め付けられる思いがしました。

特に心に残ったのは、被爆者の方による体験証言です。ご自身の青年期の記憶を、ひ孫に同じ経験をさせてはいけないと語ってくださる姿から、戦争や核兵器がもたらす悲惨さ、そして生き延びた方々が背負ってきた苦しみの大きさを実感しました。「あの日のことを語れる人は、年々少なくなっている」という言葉が胸に響きました。直接お話を聞いたことは、私にとってかけがえのない経験となりました。

今回の参加を通じて、平和は与えられるものではなく、私たち一人ひとりが意識し、行動し続けてこそ守られるものだ学びました。被爆者の方々の想いを次の世代へとつなぐため、私自身も身近な人々に今回の経験を伝え続けたいと思います。長崎で学んだことを胸に、日々の生活の中でも平和のためにできることを実践していきたいと強く感じました。

今回、私は初めて連合平和行進に参加させていただきました。

8日はナガサキ集会に参加しました。原子爆弾の投下と被害状況。被爆者の被爆80年の体験談を聞きました。被爆者も高齢になり被爆したことを語り続けることが難しくなったと言っていました。そんな中、ナガサキ・ユース代表団、高校生平和大使の若者からのメッセージを聞きました。大学生、高校生の被爆者から伝えられた平和の大切さ、願いが伝えられていること意識の高さに感動しました。

9日は天候が悪く長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典には参加できませんでした。

長崎原爆資料館見学して、実際に長崎の町に落とされた実物大の爆弾も拝見しました。

このサイズのもので町一つ、多数の人間の命を消滅させたのかと驚愕したのと同時に原子爆弾の恐ろしさを改めて感じました。

戦争の悲惨な状況を経験された語り部の方々も高齢化している中では次の世代へ戦争の恐ろしさ、愚かさをしっかりと繁いでいく事が重要ですが被爆地のナガサキではしっかりと若年層に引き継がれておりました。しかし、やはり県外に居住する私達からすると戦争のことや被爆地の事はどこか遠い出来事になりがちだとも思いました。

ピースウォークでは連合長崎青年部の方に説明していただきながら被爆地の跡地を見学しました。

原子爆弾落下中心碑では上空500m付近で爆弾が起きたこと、想像を絶する爆風、熱線で3秒足らずで人、都市が消滅した事などの説明を受けました。

またその周辺では爆圧によって家屋が上から押しつぶされ地層のようになっている場所もあり普段の生活雑貨がまるで化石の地層のように段々になっておりました。人骨もまだ多数埋もれているそうです。

今回の私たちが体験した事は自身の内だけではなく自単組、自職場また家族や友人と話せる機会を設け積極的に話を展開していくことが非常に重要です。伝え継ぐことが戦争を風化させない大切な事だと平和行進に参加して強く思います。

連合平和行進に参加し自身の戦争に対する意識、考え方、平和に向けての行動と様々な角度で再認識できた非常に有意義な活動となりました。ぜひ、他の地域での平和行動にも参加してみたいです。自分以外の方にも参加していただき見聞を広めていただきたいと思います。

高崎地協 高崎市職労
村井田 悠介

私は今回初めて連合群馬の平和行動に参加させていただきました。今年は戦後80年という節目の年でもあり、小学生の頃に戦後50年と言っていたなあ…その頃は50年前の大昔に日本は戦争をしていたんだなあ…と漠然と感じていたことを思い出しました。それからさらに30年が経過し、今の子どもたちにとっては戦争や原爆なんてさらにもっと遠い大昔の歴史上の話に感じているのではないかと、被爆者の声を直接聞いて、その悲惨さを私の息子や娘にも伝えていきたいと考えたことが参加のきっかけでした。

初日の「連合2025平和ナガサキ集会」では、原爆投下時に9歳だった羽田麗子さんの訴えを聞くことができ、「突然の爆風で吹き飛ばされた」「皮膚が剥げて爛れ、血だらけの人が歩いてきた」「人がどうかもわからなくなってしまった遺体がたくさん転がっていた」など、悲惨な様子だったことが伝わってきました。まるで今の平和な日本では想像もできない、失礼を承知で表現すれば映画やゲームの中のような恐ろしい世界ですが、80年前にはそれが現実だったということ、羽田さんはその光景を目の当たりにし、80年間何度も何度も脳裏に蘇らせながら生きてきたということは、私自身もこれからずっと忘れてはならないこと、子供たちにも伝えていかなければいけないこととして、深く心に刻まれました。また、先に「今の平和な日本」と表現しましたが、吉田文彦センター長の講演では、今なお世界にはたくさん核兵器とそれを保有する核保有国が存在することの恐ろしさを実感させられました。日常が核兵器ひとつで一瞬にして80年前の長崎のような悲惨な世界に変えてしまうことなどあってはならない！核兵器は廃絶しなければならない！と私からも強く訴えていきたいと思ひます。

集会のなかでは、ナガサキ・ユース代表团と高校生平和大使の紹介からの訴えもあり、若い世代も核兵器廃絶について真剣に考えていく取り組みは非常に大切であり、さらに若い世代にも続けていき今後戦後90年、100年、150年、200年と、この悲惨な記録や記憶を継承して行ってほしいと感じました。

2日目は、雨天の影響で「長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典」に参加はできませんでしたが、11時2分に全員で黙祷を行い、爆心地付近に折鶴献納をしました。資料館の見学では、原爆により被害を受けたままの状態の展示品を多く目の当たりにし、溶けたり曲がったりくっついたり、想像もできない威力だったことを感じさせられました。特に印象に残ったのは写真で、放送倫理などが厳しくなってしまった現代のテレビなどでは映せないのではないかと感じてしまうくらいの悲惨な遺体の写真などまで展示されていました。館内には外国人観光客も多かったのも、きっと核保有国から来ている方もいたと思います。ぜひ、母国にこの記憶を持ち帰り、核廃絶を訴える仲間を増やしていただきたいと感じました。その後の「ピース・ウォーク」では連合長崎の方々がピースガイドをしてくださり、爆心地公園の原子爆弾落下中心地碑や被爆当時の地層、平和祈念像などの見学も行いました。

今回の平和行動への参加で経験したことは、単組や職場、家庭へ持ち帰り、多くの人へ伝えていきたいと思ひます。8月9日に購入した長崎新聞には数ページにわたり、ところどころに原爆の悲惨さを訴える広告が掲載されていたので、早速家族にも見せ、私自身も永久保存していきたいと感じました。結びになりますが、企画運営の連合群馬のみなさま、同行した各産別のみなさま、3日間たいへんお世話になりました。ありがとうございました。



.....
基幹労連 大同特殊鋼労働組合関東支部
泉 哲平

今回、私はプライベートで10年ほど前に原爆資料館を見学した際に戦争の愚かさ、原爆の悲惨さを知り「何かしたい」という思いが胸にあり続け、このような活動があるのを知り参加した次第でした。

私が1番印象に残ったのは何とんでも被爆者のかたの生の話を聞いたことでしたが中でも「こういった話をした時にいつも3つ、守ってほしいと伝えています。」と前置きがあり、続けて「1つ目は自分の命はもちろん、他人の命も含めて命を大事に。2つ目は差別をしない。3つ目はどんなことも話し合いをして解決をする」といったような内容を聞いたときに、当たり前のようなことを言っているようですがこの被爆者のかたが言うと深すぎて自然と頷いている自分がいました。

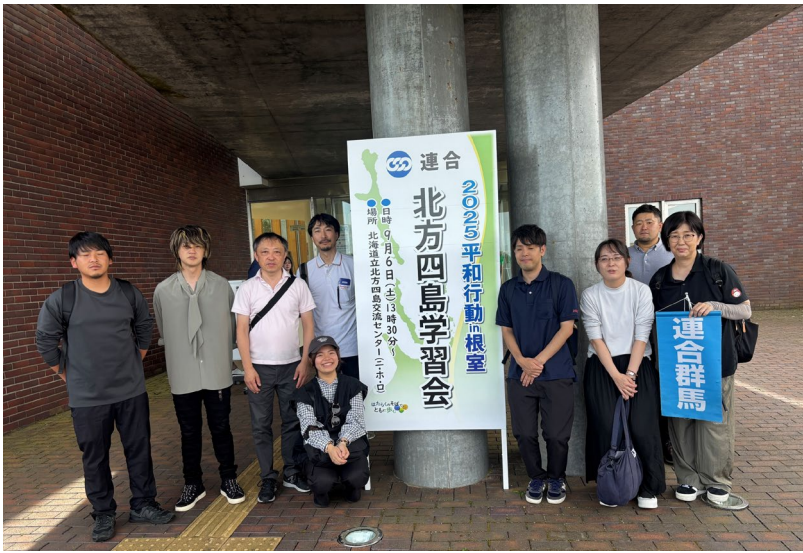
また、戦時中や原爆投下後の生活や食事の話も聞けましたがこれも耳を塞ぎたくなるような凄惨さで今の私たちの生活、蛇口を捻ると水が出て、ボタン1つでお湯が沸き、スーパーに行けば何でも買えるという私たちにとっての「当たり前」に対しても感謝の気持ちが最近芽生えてきており自分なりに今回、この平和活動参加後より多少、心の変化ができたのか見る目、聞く耳が変わってきたように自身感じます。

その要因で大きいのは今回参加させていただきました初日の平和集会への参加、2日目の原爆資料館の見学、ピースウォークへの参加とどれをとっても高校生を含む10代20代のかたが大勢受け入れ側で参加されている姿を見たときでした。戦争を知らない若い人たちがつたないながらも原爆投下されたときの様子を語っている姿を見たときには「これは絶対に風化させてはならない」という強い思いが伝わってきたように思います。

以上のように貴重な話をたくさん聞く機会をいただきまして私自身、一言でいうと勉強になったと思っておりますがそこで消化して終わらせるのではなく経験した私たちが「見聞きしたことを職場や家庭で広める」ということを今後やっていくのが参加した私たちの使命と思っております。こうすることが長崎で受け入れてくださった関係者のかた達への恩返しなのではと思います。

最後に、たった2泊3日の活動でしたが非常に内容の濃い3日間となり、最終日には結果的に帰りの飛行機の出発が2時間遅れというトラブルにもあいましたがそんなことは忘れるくらいに非常に貴重な経験をさせていただき感謝いたします。ありがとうございました。





自動車総連 村上開明堂労働組合 田中 祐一

今回、初めて平和行動へ参加させていただき北方領土問題について学び、改めて領土問題の複雑さと難しさを考えさせられました。

戦後の国際秩序のなかで生まれたこの問題は、単に「領土の返還」を求めるだけでなく、歴史的経緯や国際法、さらには安全保障や経済関係など、さまざまな要素が絡み合っていることがわかりました。

「北方四島学習会」にて元島民のお話が聞いたのは貴重な経験でありました。当時の緊張感や島民それぞれの無念さなどが伝わり、風化させてはいけない問題だと改めて認識しました。

翌日の「2025 平和ノサップ集会」で岬から薄っすら見えた歯舞群島を見てわずか数キロ先に占領された島があり、そこでは今でもロシアによる実効支配が続いているという現実、やるせない思いが込み上げてきました。現在、元島民の方々の高齢化が進んでおります。記憶や証言の継承が難しくなり元島民が中心となってきた活動が弱まる事が今後の課題となってきますが、我々次世代が継続して歴史や背景を学び関心を持ち続けることで北方領土返還へのカギとなる事と信じております。

今回の平和行動を通して学んだことは大変有意義であり貴重な経験となりました。ありがとうございました。

.....

自治労 前橋市役所職員労働組合 林 貴輝

今回の平和行動では、学習会と平和ノサップ集会を通じて、北方領土問題の重さと現実を改めて実感しました。

学習会では、専門家の講演を通じて、戦後の歴史や国際関係の中で北方領土がどう位置づけられてきたのかを学ぶことができました。北方領土は単に過去の歴史問題ではなく、現在も解決に至って

いない「生きた課題」であることを強く認識しました。さらに元島民の方から直接伺った証言は、何よりも心に響くものでした。わずか8歳で銃口を突きつけられた体験や、強制送還の苦しさ、ふるさとに帰れないままの無念さ、そして「せめて先祖の墓参りがしたい」という切実な思い。語られる一つひとつの言葉の重みを深く受け止めました。

平和ノサップ集会では、納沙布岬から歯舞群島の島影を望みました。当日は快晴といった条件ではなかったですが、水晶島の姿を目視で確認することができました。根室市の納沙布岬から歯舞群島まではわずか3.7キロの距離です。物理的には「すぐそこ」にあるにもかかわらず、国境問題の未解決によって自由に行き来できない現実に、近さと遠さの矛盾を強く感じました。まさに「距離は近いが、解決は遠い」という現実を象徴しています。

今年は戦後80年という節目の年です。広島・長崎の記憶は多くの人々に語り継がれていますが、同じく戦後から80年を経てもなお解決していない北方領土問題は、十分に社会の注目を集めているとは言い難い状況にあります。その一方で、元島民の方々の平均年齢はすでに90歳に迫り、生存者は当時の3分の1以下、5千人を下回る状況にあります。残された時間は限られており、語り部がいなくなれば貴重な体験や記憶は失われてしまいます。故郷に戻る機会を得られないまま世代が交代しつつある現実を前に、「今すぐ解決しなければならない」という切実さを強く感じました。それでも、元島民の方は「自分がいなくなっても思いが次の世代に引き継がれば良い」とも語っていました。その姿勢に、運動の意味と責任を改めて思いしらされました。返還の道のは決して容易ではありません。しかし思いを受け継ぎ、次の世代へとつなぎ続けることで、いつの日か必ず故郷に戻れる日が訪れるはずで。

近くて遠い島々を目の前にして、北方領土返還の実現に向けた運動を一層広げていく必要性を胸に刻んだ平和行動となりました。

……………
電機連合 PHC労働組合
関根 寛直

今回の根室の平和行動に参加して、北方四島学習会のAコースで山田吉彦先生の講演と元島民の方の生の声を聴きました。

山田先生のお話では北方領土だけでなく、日本の国土、領海、海洋利権など大きな視野に立った考え方で、どうして北方領土が重要か、尖閣諸島が重要かをわかりやすく説明していただきました。日本は国土は狭いですが、四方を海に囲まれているため面積で見ると世界で第6位の海洋大国であり、海の深さも考慮すると世界第4位であること、近年レアアースの採掘技術が向上しており、この海洋には大きな可能性があることなどちょっとワクワクする内容でした。現在ロシアの無法な対応により北方領土へのビザなし交流や人道的な各種協力も停止してしまっており、まずはそこから早期に回復させなければ4島の返還がますます難しくなることなどをお聞きするに、政府にやってもらわなければならないことは山積みですが、山田先生も先日国会議員になられたので、これからの活躍をとっても期待してしまいます。

元島民の方のお話は、彼ら、彼女らの父母、祖父母が苦勞して確立した生活基盤を一気に失い、本土に戻されてもその後の生活に大変苦勞したことなど、実体験からの生々しい感情がこもっており、とても勉強になりましたし、考えさせられました。皆さん高齢になってしまっており、一日も早い解決が必要だと改めて思いました。国後島と沖縄はどっちが大きいかわかりますか？という問いかけにはハッとさせられました。それだけの規模の経済基盤、生活基盤がロシアに不法に奪われていることを我々はしっかり認識しなければなりません。

翌日の平和ノサップ集会は雨が降りそうな、霧がだいぶ濃い状況でしたが、幸運にも集会の開始前のひと時天候が回復し、今回は見られないとあきらめていた歯舞諸島が少し見え、雨も降らずに持ちこたえました。このことが今後の良い兆しであるといいなと思いました。

貴重な体験をさせていただきありがとうございました。

……………
電機連合 パナソニックエアコン・コールドチェーンユニオン
岩間 智子

平和行動の3日間を通じて、元島民の方が生きているうちに島へ行くことを実現させたい、領土の実行支配・侵略を許してはいけない、まずは今住む人との交流を重ねて何かの時に相互協力ができ

ようにしたい、これらのことが自分事となり自分の願いごとになりました。実現へ向けて引き続きできることを探し、協力していきたいと思えます。

1日目 9月5日(金) 釧路空港着、釧路市内へ移動

昼過ぎについた釧路市湿原展望台では快晴で湿原が遠くまでよく見えました。館内では湿原の植物や動物、魚について知ることができました。夕方日没時間頃に幣舞橋では涼しい風と真っ白な霧の中で、海霧「じり」を体験しました。平和行動とはズレてしまっていますが、最近ニュースになっていたメガソーラーの建設・開発について、湿原面積を減らすことで固有生物へ悪影響があることはもちろん、この気候の土地へソーラーパネルを設置することがとても無駄ということです。農作物が育たないほどの霧と日照の少ない土地でソーラーパネルを設置しても、発電量は少ないのに海霧の中で金属等が倍速で劣化し、投資回収できず製品寿命を迎えるでしょう。太陽光発電システムを開発・販売している会社のひとりとして、これほど太陽光発電が向いてない場所に貴重な自然を犠牲にして設置するのはやめてほしい、早く元の湿原に戻ってほしいと思えます。

2日目 9月6日(土) 北方四島学習会 Aコース

講演① 「海から見た北方領土問題」

「離島へ人が住み暮らすことが安全保障へつながる」ということばがとても勉強になりました。離島での生活に課題は多いものの、離島をどう扱うかが国の国境をどう捉えるかにつながり、外交に影響することがわかりました。北方領土については、7月末の千島列島の地震・津波などをふりかえると、数キロという近距離にあるので万が一の際の協力、災害時の相互協力や遺体捜索ができたらいいいと思えます。

講演2 「ふるさと北方四島への想い」

児玉さんの祖母の入水自殺の話はとても胸に迫るものがありました。望郷の思いの強さ、どれほど切羽詰まった感情だったか、聞いているうちに「海辺の鳥や魚は北方領土へ行けるのに、人はなぜいけないのか」とも思いました。本当に、元島民の皆さんがご存命のうちに、せめての墓参り交流ができるよう、せめてコロナ前の状況に戻ってほしい、少しでも状況・関係が改善されてほしいと思えました。

3日目 9月7日(日) 2025平和ノサップ集会

あいにく曇天で少し霧が出ていましたが、少しの晴れ間に貝殻島の灯台(写真)と水晶島が見られました。他の平和行動とは違い、連合の他に参加団体がほとんどないことに危機感をもちました。



元島民が減っている中で、連合が継続的に取り組んでいかなければ・・・元島民の他に誰も声を上げない、人の関心が減っていき声の少ない主張は弱くなり、そのうちかき消されるのではないか…そうならないよう、連合は継続して取り組むべきと感じました。

.....
JAM 明星電気労働組合
木暮 悠哉

今回、平和行動 in 根室に参加し、北方領土問題の背景や実際に体験されたことを直に感じる事ができました。

学習会講義①では、教授の方に北方領土はどのような文化や産業が盛んな島であり、北方領土問題前の島の状況や現在の海の事例や今後の漁業の問題を踏まえて幅広く学ぶことが出来ました。

講義②のふるさと北方四島の思いでは、当時の暮らしと戦争後の実体験を交え教授の講義の様な学習的な同じではなく、実際にその場にいるような生々しいお話しでした。なぜ、島民がこの様な暮らしをしなければいけなくなり銃口を向けられたり、逃げ、隠れなければいけないのかその場にいるような感じで鳥肌が立つような講義を聞く事が出来ました。

一番印象に残ったのは『政府はなんでもっと早く、戦争を終わらせなかったんだ。』という言葉でした。

この言葉から、核兵器の投下されるまで判断がくれ、対応が誤り、遅れることで、今現在の80年間、解決されない問題へと発展したのかなと感じました。

また、当時、生きていた方が生きていううちに問題を解決しなければ、問題解決までにさらに時間が掛かるのではないかと感じました。

当時の方のお話は、その場にいた方でないとわからない緊張感や体験を言葉や身振り手振りで表現やお話ししてくれるため、本を読んだりパンフレットを見ただけでは伝わらない感情を感じることが出来、このことを伝えなければならぬと同時に、ここまで伝えきるか不安になりました。

納沙布岬での2025 平和ノサップ集会ではすぐ近くにある島々が、今問題を抱えている島であり、こんなに近くにあるのに、80年間問題が解決され

ていなく、島々にはまだ人が残され、現在も位っているのだと感じました。

最後に全国各地の連合の集まりの多さに圧倒されましたが、この中の誰かがやってくれるだろうとは考えず

この中の1人の執行委員として今回の平和行動に参加し、ただ行っただけの人にならずに

署名活動や地協活動の際に周りの組合員に伝え少しでも多くの後世に伝えていく活動を今回の平和行動を通して感じました。

.....
基幹労連 大同特殊鋼労働組合 関東支部
寺本 朱里

日本人として、北方領土含む領土問題に関して、当事者意識を持つ機会となった。実際に元島民の方々の思いや参議院議員の方の講話を聴いて、ロシア政府に対するやるせない気持ちは募るばかりだった。なぜ結んだ条約を破って日本に攻めて来たのか、なぜ日本以外の国も含め他国の領土を強制的に奪うのか、なぜ戦争をしてまで自国の利益しか考えられないのか、訴えたいことはたくさんある。今なお訴え続けている方、悔しい辛い思いをしながら亡くなった方がたくさんいる。現在、元島民の平均年齢は90歳となり、人口も5000人を切っているという。少しでも早く、一人でも多く故郷に帰ることができればと心から願う。そして彼らだけでなく彼らの先祖のために日本国民としてこの問題に向き合う必要がある。

現在、日露の関係は過去最悪だ。だからこそ「運動を続けるんだ」と話していた方々を見て、私も彼らの想いを伝承できる人になろうと思った。また、北海道民と現ロシア住民の対個人での関係のように、私も旅先で出会うロシア人ともより一層友好な関係を築いていきたい。教育によって北方領土は日本の領土であること、日本側の必死の歩み寄り個人レベルでは理解されていないと思う。踏み込むことができるならば、平和について議論できるような関係を築きたい。

今回、この問題に対して何かできることはないか、学び考える機会をいただけたことに感謝いたします。

.....
高崎地協 東京電力労働組合高崎支部
清水 靖幸

今回、初めて連合の平和行動 in 根室に参加させていただき、あらためて北方領土問題について理解が深まり、平和の大切さを考えることができました。

北方四島学習会では、元東海大学海洋学部教授の山田吉彦参議院議員による、「海から考える北方領土返還運動」というテーマで、四島の自然や、戦前の人々暮らしや現在の四島の様子など大変興味深く聞くことができました。同時に現在もロシアによるウクライナ侵攻により、北方領土問題の平和条約交渉が中断され、解決の難しさを認識し、あらためて私たち一人ひとりの理解と協力が不可欠で、継続した解決への取り組みを実行しなければならぬと実感しました。

元島民の方による体験談とふるさとへの想いを聞き、終戦後2年間共同生活を送り、言葉が通じないにもかかわらず、徐々に信頼関係も芽生え、協力態勢も深まっていたところ、強制送還されたこと、その後住む家が無く家族バラバラで暮らしたこと、現在も墓参りすらできないことなどその時の島民の方々の想いを察すると、胸が締め付けられる思いになりました。

元島民の方々の体験談を聞くことは、語り継ぐ上で非常に重要ですが、平均年齢も89歳を超え、継承していくことの難しさと同時に、次世代への継承と早期解決に向けた取り組みが重要だと認識しました。

一人ひとりができることは署名運動など限られていますが、職場、家族、友人と会話し、継続して伝えていくことが重要だと思いました。

今回このような機会をいただき平和の重要性を体験できた有意義な活動でした。ありがとうございました。

.....
高崎地協 太陽誘電株式会社
齊藤 哲輝

9月6日～7日に開催された「2025 平和行動 in 根室」に参加した。1日目は北海道立北方四島交流センターでの『北方四島学習会』に出席し、北方領土問題の歴史的経緯と現在の課題について学んだ。講義では、海の安全保障や資源の視点から見た北方領土問題の論点整理、そして元島民の方々による体験談を聞いた。特に、歯舞群島や択捉島に故郷を持つ方の「海の向こうに見えるのに帰れない」という言葉が印象に残った。会場では、参加者が真剣に耳を傾け、今なお続く問題であることを肌で感じた。2日目は望郷の岬公園で『2025 平和ノサップ集会』に参加し、「北方領土の返還と日ロ平

和条約の締結」を掲げて全国の仲間と意思を共有した。集会では、返還要求運動の継続や世代継承の重要性が語られ、次回の「平和行動 in 沖縄」へと旗が引き継がれた。最後は会場全体で気持ちを一つにして閉会となった。

【感想】

今回の行動を通じて、教科書でしか知らなかった北方領土問題をぐっと身近に感じる事ができた。正直それまでは「歴史の章の一つ」という印象が強かったが、現地で学び、元島民の声を直接聞くことで、いまま現在進行形で人の人生に影響している問題なのだと理解が深まった。

自分にとって「故郷に帰る」は当たり前だ。仕事や用事で遠くに行っても、帰ろうと思えばすぐ帰れる。しかし、元島民の方々は80年近く帰れないまま高齢化が進み、故郷を目の前にしながら渡れない現実がある。その事実に触れたとき、胸が詰まる思いがした。帰れないことが与える喪失感や、記憶を語り継ぐ難しさは、想像以上に重い。

一方で、ロシアとウクライナの戦争など国際情勢を考えると、返還は簡単な話ではないとも率直に感じた。むしろ、今は難しさが増しているかもしれない。それでも、そこで歩みを止めるのは違う。今回、さまざまな立場の登壇者から「声を上げ続けること」「世代につなぐこと」の大切さが繰り返し語られた。解決への道のりが長くても、灯を消さないことが未来につながる。

今回学んだことは、自分の中だけにしまわず、家庭や職場など身近なところで共有していきたい。普段は話題にしにくいテーマかもしれないが、だからこそ知った人が最初の一步を踏み出す意味がある。イベントの雰囲気や、海の向こうに島影が見える風景、そこで語られた率直な言葉を、自分の言葉で伝えていきたい。

平和や領土の問題は、遠い世界の話ではなく、私たち一人ひとりの意識と行動にかかっている。今回の参加は、とても貴重な経験になった。これからも関心を持ち続け、機会があれば学び直し、周囲に伝える役割を担いたい。大げさでなく、「歩みを止めない」ことを自分の合言葉にしていく。